

私はソーシャルワーカー

私はソーシャルワーカーなのだろうか？」

ささはらメンタルクリニック ソーシャルワーカー 永井 幹丈

はじめに

私は「ソーシャルワーカー」というテーマで原稿を書いてほしい、という依頼を受けた。実は大変困ってしまった。確かに私は、社会福祉士であり精神保健福祉士として精神科病院で8年間、現在の精神科クリニックで十年ほど働いている。対外的には「ソーシャルワーカーの永井」といいます。よろしくお願いします」と挨拶をして関係を始める。しかし、ソーシャルワーカーとは何？私をしていることはソーシャルワーカーなの？との思いは長年こころの片隅に生き続けている。さらに介護保険や障害者総合支援法を中心とするソーシャルワークを取り巻く在り方を見ると違和感は増すばかりで、ソーシャルワーカーとしての私のアイデンティティはガタガタと音を立てて崩れる一方である。そこで私なりのソーシャルワークをまとめてみたいと思う。

一．ソーシャルワークの特性

ソーシャルワークは「生活・大生・生き方」を視点とするところに特徴がある。生活・生・生き方」は「一般性とともに多様性・多面性・個別性・独自性を基本とする。ソーシャルワークは多様性・多面性・個別性・独自性に向き合わざるを得ないために混乱し曖昧になりやすい。ここにソーシャルワークの不確かさが存在する。多様性・多面性・個別性・独自性という曖昧さに向き合うがためにソーシャルワークが定義しにくいのは当然の帰結である。

二．ソーシャルワークのマニユアル化

ソーシャルワークはクライエントへのアプローチと環境調整との間を行ったり来たりしながら、現在は環境調整の方に大きくウエイトを移しているように感じられる。介護保険や、障害者総合支援法におけるあり方も、マニユアル化を推し進め、サービスをクライエントにあわせて組みこんでいるようにみえる。サービスありきで人間不在に感じられるのは私だけであろうか。たぶんそれが、最近の潮流であろう。ソーシャルワークのコーディネート機能重視がそうさせているのではなかとと思われる。福祉は契約中心のサービス業が主流になった。それに伴いソーシャルワークもサービス業という性格を帯び始めた。サービスは目に見える形で提供されるのがわかりやすいし、周りにも説得力を持ちやすい。そのために具体的なサービスを提供するコーディネート機能は時制にかなったものである。

しかしソーシャルワークが対象とするのは、社会の中の「欠」である。言い古されたことばではあるが、人はパンのみで生きているのではない。人は感情の生き物でもある。夢も希望も楽しみも、悲しみ・寂しさ・辛さ・挫折感・喪失感・無力感、怒り等の複雑な感情や想いを持ち合わせた存在である。人の気持ちや想い、感情は眼には見えない。そのためサービスには馴染みにくい。それでもソーシャルワーカーは眼に見えないクライエントの気持ちや想い、感情を大切にすることを先ず優先させることが大切であるはずだ。なぜなら、物的な見えやすいサービスのみで生活が成り立つことはほとんどないのだから。

三．ソーシャルワークの独自性

ソーシャルワークが取り組むのは、困難を抱えた人や家族、集団、地域社会であるが、基

本は、「社会に生きる人」である。人の人生は、その家族に影響を与える。また家族はその成員である個人に影響を与える。さらに、個人及びその家族は地域や社会から影響を受け、個人・家族は地域や社会に影響を及ぼすというように、それぞれが相互に影響を与えるし、与えられてもいる。つまり、人、家族、地域・社会は相互作用して存在している。システム論でいえば、システムには同位システムが存在し、かつ上位・下位システムが存在して、相互に影響を与え合っていることになる。

人の困難は家族関係を含む社会関係の中で起きる出来事である。人が下位システムとして上位システムと相互作用しているために、人のみに焦点を当ててもその人の一面しか見えない。もちろん人のパーソナリティのみに焦点を当てても困難の理解は偏るだけであり解決は難しい。ソーシャルワークは人と人、人と社会の関係に眼を向け、さらに社会資源を活用することによって困難の解決を目指す。また人間は生理・心理・社会的な側面を合わせ持ち、歴史を生きてきた存在でもある。歴史という縦軸と社会という横軸の交差点上に生きるのが人である。ソーシャルワークは全体としての人間にアプローチしなければならぬ。ここにソーシャルワークの独自性があり、カウンセリングや精神療法と大きく異なる視点がある。

四・ソーシャルワーク関係

時代の移り変わりにあわせて、生活・文化は大きく変化する。また、生活・文化の変化に対し、制度・施策は変わり続ける。そしてソーシャルワークのあり方もまた変化する。それは常にソーシャルワークが生活（大生・生き方）を見続けてきた表れである。

しかし、制度・施策は平等性、効率性、一般性を基本とするために、多様性・多面性からなる生活（大生・生き方）とは馴染みにくい。社会も人間も矛盾を抱える存在であるために、生活は困難を抱きやすい。制度・施策がどんなに整備され発達しても、社会の矛盾を補うことは不可能である。ソーシャルワークは社会の矛盾に向き合い、矛盾を抱えながら困難を生きる人に働きかけなければならない。この困難な状況の解決に向けて大切な視点が「関係性」である。クライエントの生活の困難や問題にクライエントとチームを組み援助関係を最大の武器として活用することをソーシャルワークでは最も大切にする。それはソーシャルワーカーがクライエントとの関係を通してしか困難や問題の深さ、幅広さに直面する術はないし、解決に向けての取り組みもできないからである。

五・まとめ

ソーシャルワークは、①生活（人生・生き方）に視点をあてるところに大きな特徴がある。②介護保険、障害者総合支援法の導入によりマニュアル化が、コーディネート機能を中心とする環境調整アプローチの主流になった。③人は家族、地域、社会と相互作用しているために、個人のパーソナリティにのみ焦点をあてても、その人の困難の理解は難しい。ましてや解決はさらに険しくなる。解決を目指すためには、人と家族、地域、社会の関係性に視点を向けたうえで、「全体としての人間」にアプローチすることが大切である。④どんなに時代が変わっても、制度・施策が充実しても、そのみで困難を解決することは不可能である。ソーシャルワーカーは社会の矛盾に向き合い、困難を生きる人との「関係」を通して問題解決に取り組みうとする。また、地域や社会に対して働き掛ける存在である。

最後にソーシャルワークを私なりに定義すると、ソーシャルワークは、生活を視点とし、人・家族・地域・社会と相互作用して困難を生きる全体としての人間に働きかけ、援助関係を活用して困難や問題の解決に取り組むいとなみである。解決過程においては、人や状況と

ともに社会に対しても働きかけ、困難や問題の改善を目指す実践である。」

「私なりのソーシャルワークをまとめてみたが、「こんなのでいいのだろうか？」と
思っている。それでも私は、こんな考えのソーシャルワーカーなのである。」